

北欧＝最近障害者事情 第7回・最終話

「高負担！だから高福祉？」ではない思想と実践

全国障害者問題研究会事務局長
日本障害者協議会理事

園部 英夫

日暮れが近づくと日比谷野外音楽堂は冷たい風がよせてくる。10月末の大集会は今年で3年続いている。2005年10月31日、天下の悪法・障害者自立支援法が成立したからだ。この日、参加した6500人の怒りと共感と決意が渦巻くなか、広島から車いすで参加した秋保喜美子さんが、不自由な言葉でふり絞るように訴えた。

「夫も重度障害者です。2人の年金から、利用料を払うのは、たいへんな負担です。作業所に、働きにいくのに、障害者が、お金を払うのは、おかしいよ」



旅の仲間の重症心身障害者の母・川瀬とし江さんの夫の源信さんは、長浜で工務店を経営するとともに滋賀県内の商店主たちをとりまとめている。旅の間、とし江さんの側で、おいしそうにビールを飲み、いつも微笑んでいた。

しかし、源信さん。ヘルシンキ工科大学にあるオタニエミの教会（アルヴェルト・アールト設計）など建築の話題では、ぐっと身体が前のめりとなり、税金の話のときも質問攻めだった。

「高い税金を払っても、それだけの社会保障が受けられると聞くが、どれくらい税金は高いの？」

■税は高いのか？安いのか？

通訳をお願いしている田口繁夫さんは、東京の大学を卒業後、恋人の生まれた国デンマークにやって



デンマーク・作業所の陶芸クラスにて

きた。情緒障害児の施設で働き、いまは医学関係の翻訳がメインの仕事だ。彼にデンマークと比較して日本のいいところを聞いたことがある。

「まず食べ物。日本は食べようと思えばなんでもある。それにうまい。つぎに自然。四季があり山がある自然。そして“あいまいさ”かな。この国は、一事が万事主張しなければ、だれからも認められない。それはいいことでもあり、しかしときに、たまらなくなることもある」

その田口さんが、源信さんからの税の質問に答えていた。

<税の概要>

①所得の8%＝労働市場付加税。

残った所得の92%に対して、②市民税約24%（各市で定める）＋③国税所得に応じて（年700万円以上）5～14%＋④医療税8%（県民税に換わり2007年1月1日より）。平均すると50%が「所得税」。

これに⑤「消費税」25%（日常生活費は除外。スウェーデンも消費税率は25%、食品12%、文化・興行6%など複数税率）。

だから、普通の市民は、高いものはほとんど買わない。直せて使えるものは徹底して直す。外食などほとんどしないのだそうだ。

一方、家賃や光熱費などを支払って、差し引き残らねばならない国基準（生活保護基準）があり、飲食、衣料、旅行などで、月一人約3500クローネ（約7万円）と定められている。

しかし、これらの大前提として、教育費は大学卒業まで無料。福祉は当然のこと。医療費も公的責任でもちろん無料だ。「保険」や「貯金」の話はほとんど聞いたことがない。こうした制度の支持は75%という調査もある。いうまでもなく、税金がどのように使われているかはガラス張りで、情報公開が徹底している。

消費税を「社会保障税」と称して大幅増税し、「福祉予算を本税体系から外す？」ことまでねらう某国とは明らかに違う。

■人々の暮らしに還元される税

知的障害のある1976年生まれのラウストさんの収入概要だ（北九州大学の小賀久さんの「みんなのねがい」報告参考）。

①早期年金4660クローネ（約9万円）＋②住宅手当2661クローネ（約5万円）＋③付加年金4000クローネ（約8万円）。その他の手当と、彼がボーリング場で働く給料とあわせて総収入は約25万円（デンマークの平均賃金35万円）だ。

ここからグループホームの住宅費、食費、前述した「所得税（給料だけでなく年金に対しても税の徴収はある）」など支払った後に、彼が自由に使えるお金が2000クローネ（約4万円）。このお金から貯金して海外旅行にも毎年参加しているそうだ。

舩添要一厚労大臣は、「障害者自立支援法の理念はまちがっていない。障害者が働いて税金を払えるようにすることはいいことだ」と言う。しかし、視点が逆立ちしていないか。

まず先にあり、大切にされるべきは障害者を含めたすべての人々の暮らしだ。納税は目的ではなく結果であるはずだ。人々が幸福に生きることを実現するために、国や自治体は存在する。戦争のためや腐敗した官僚や議員の好き勝手にさせるためのない。住環境や生活環境、そして「仕事をのぞむすべての人に仕事を提供することが自治体の義務」（ホ

イヴァンゲン就労センターのヴァイス前所長）なのだ。一人一人の暮らしの営みの上に、適切な税の負担と再配分がされる。

■すべて政治は人々の暮らしのためにある

エイビュー・コムーン（自治体）は人口8000人。アンデルセンの生まれたオーデンセからバスで30分くらいのところにある。

町の議会は月曜と水曜日の夜7時から開かれる。議員は無給で、それぞれが仕事を持っている。商店主、農民、学校の教員、ヘルパーなどなど。言葉はわからないので30分ほどで退席する予定だったが、議場は猛烈に熱が入り、退席しがたい雰囲気ですぐ1時間ほど傍聴した。

あとで通訳に議事の内容を聞くと、今夜は予算の特別議会で、超過した町財政のどこを押さえるかという議論だったそうだ。「お年寄りが増えていから、その支出は増だけれど、これは減らせない」「サービス内容は下げられないから、これからつくる予定のホーム建設をのぼそう」「でもホームの修理代は必要だ」などなど、それぞれの立場から徹底して意見を交わし、合意を重ねる。

ほとんどの議員は政党に属し、労組や障害者団体からも支持があるそうだ。ちなみにヘルパーの労働組合組織率は98%。議員選挙の投票率は90%以上だという。

子どもを預けて安心して働ける。高い出生率が保たれ、女性の地位は高い。18歳になればだれもが自立する。高齢者介護も社会が責任をもつ。そんな北欧の政治と社会はどうして実現されているのか。

まず「みんなは一人のために」がある。だから、「一人はみんなのために」と連帯できる。そうした思想と実践におしみなく努力していることなのだ、と確信している。

□参考資料「北欧ノート」

<http://www.nginet.or.jp/~kinbe/>



コペンハーゲン市内の特設リンク（王立劇場前広場）